

# 四季報

## 設計協会青年部活動NEWS

2005・03 (特集号)

発行 / (社) 福島県建築設計協会 県北支部 青年部 情報委員会  
所在地 / 〒960-8043 福島市中町 4-20 みんなのビル  
電話 (024)521-4033 FAX (024)521-5087

### 特集

#### 建築設計協会が『ユニバーサルデザイン』フォーラム を開催

県北支部青年部会が企画・運営し基調講演会やパネルディスカッション

去る平成16年12月4日(土)。コラッセふくしまにおいて(社)福島県建築設計協会県北支部が主催する『ユニバーサルデザイン』フォーラムが開催された。これは県北支部青年部会が2年越しで企画立案し準備を進めてきたものであり、当日の運営も青年部会員が一丸となって開催したものである。みんなにやさしいってなあに? ...をテーマに、視点のちがう2名の講師による基調講演会やパネルディスカッションにより、一般の方々と一緒にユニバーサルデザイン(UD)を考えた。手話による解説をしながらのフォーラムは約150名の聴衆を集めた。はたしてUDに対する何らかのメッセージを伝えられたのだろうか? 当日来場者をお願いしたアンケート結果を含め、あらためて振り返ってみた。

#### 事業目的は?

##### (1) ユニバーサルデザインの啓蒙と推進

現在、福島県において推進されている「ユニバーサルデザイン」の精神と考え方を広く県民に啓蒙し、官民協働によるユニバーサルデザインの推進を目指す。

##### (2) 多様な視点からユニバーサルデザインを探る

近年の社会資本整備は障がい者や高齢者の立場を最重視してきたが、これからは子どもたちや健常者も含めた多くの人々の視点も取り入れ、多様な角度からユニバーサルデザインを探る。

#### 開催内容は?

##### 第1部 基調講演 Part 1

講師: 菊地政隆氏(東京都江東区白河かもめ保育園保育士)

テーマ: 「子どもの目からのユニバーサルデザインとは」

##### 基調講演 Part 2

講師: 南涼子氏(日本ユニバーサルカラー協会 理事長)

テーマ: 「色彩からユニバーサルデザインを考える」

##### 第2部 パネルディスカッション

テーマ: 「みんなにやさしいデザインてなあに?」

コーディネーター: 松井壽則氏(日本大学工学部 助教授)

パネリスト: 南涼子氏(日本ユニバーサルカラー協会 理事長)

菊地政隆氏(東京都江東区白河かもめ保育園保育士)

齊藤隆夫氏(福島県土木部建築指導グループ 主幹)

鈴木宏幸氏(設計協会県北支部青年部 部会長)

#### フォーラム状況写真



福島県建築設計協会県北支部長 田畑光三 挨拶



基調講演 Part1 菊地 政隆 氏



基調講演 Part2 南 涼子 氏



第2部 パネルディスカッション

主催 社団法人 福島県建築設計協会 県北支部

共催 社団法人 全国市街地再開発協会 様

後援していただいた皆様

福島県 福島市 福島市教育委員会 住まい・まちづくり活動推進協議会 ふくしま建築住宅センター 福島商工会議所 (社) 福島青年会議所 福島民報社福島民友新聞社 福島建設工業新聞社 福島タイムズ社 NHK福島放送局 福島テレビ

福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島 ラジオ福島 ふくしまFM FMポコ

ご支援ご協力をたまわりまして、ありがとうございました。



基調講演内容 Part1 講師：菊地政隆 氏

テーマ：「子どもの目からのユニバーサルデザインとは」

保育士という立場から感じる日常生活の中のユニバーサルデザインについて、ご講演いただいた。菊地氏の体験にもとづいた話に会場はくぎ付けになった・・・

『保育士を始めたのは、子供と関わる仕事の奥深さを感じたからであり、子供たちの性格や常識などの将来を左右する大切な成長期に携われるからです。』と菊地氏は話し出した。

菊地氏が保育士になった当時は、男性保育士が全国で0.7%しかおらず、仕事に対する偏見を感じたそうであり、「保育士は女性の仕事だ」という認識が常識的になってしまっていたからだという。菊地氏は現在、正しい認識をもってもらいたいという思いからメディア等での活動も行っている。「男性が子育てするのは普通のことだ」という認識を、子どもたちや一般の人にもわかっていただきたい。」との思いを述べた。ユニバーサルデザインに関しても同じことであり「すべての人が同じ認識で生活できるというソフト部分が大切であり、自分たちがユニバーサルデザインの一員であると認識することが必要である」と自論を熱く語った。

また、「現在の遊具は大変使いやすく設計されているが、誰かが子供たちに正しい遊具での遊び方を教えてあげなければ、意味がなくなってしまうのではないかと。正しく教えてあげることがユニバーサルデザインのサービスに値する。」とも述べた。

ある幼稚園の園長先生が菊地氏にこう話したという。「園内をバリアフリーにした結果、子供たちの危険回避能力が低下しているのではないかと。そのとき、自信のある回答ができなかったというが、今は見方を変えればよいのではと話す。「バリアフリーにすることは良いことであり、決して悪いことではない。危険回避能力が低下するというのであれば、別の方法で能力を向上させてあげればよい」と。ユニバーサルデザインに関しても、同じように長所や短所になりうる要素は含まれているが、人がより良い認識の上で生活をすれば、改善される問題もある。これもユニバーサルデザインのソフトの部分ではないだろうか。

以前、菊地氏は聴覚障がいの子どもを受けもったことがあった。そのとき感じたことは、その子を『障がい』があるということ意識しすぎてしまうのは、いけないことだという。私たちは、障がいのある人たちと触れ合う機会がほとんどないまま生活してきたので、障がいを持つ人を特別に意識してしまいがちだ。聴覚障がいのある子もみんなの和に入れてあげる、そして子供たち自身がその子は特別ではないと認識させてあげることが大切ではないか。

また、菊池氏は子ども向けの歌をCDにして販売している。そのCDで子どもたちを遊ばせたときに、聴覚障がいを持つ子に配慮が足りなかったと気づいた。そこで手話を取り入れた歌を作った。(アカペラと手話により会場全員で楽しく歌う)

最後に菊地氏は、自分たちが子供たちにユニバーサルデザインを正確に伝えていければ、子どもたちが大人になったときにそれが常識になる。そうなるように子どもたちと接していきたいと話し講演を締めくくった。

基調講演内容 Part2 講師：南 涼子 氏

テーマ：「色彩からユニバーサルデザインを考える」

色彩がわれわれに与える影響やユニバーサルデザインを色という観点から見た場合についていくつかの例をまじえながらのご講演をいただき、分かりやすい説明に皆うなずきながら聞き入った。

色彩は衣・食・住に密接に関わっている。たとえば、われわれが生きていくために食は欠かせない。魚や野菜の鮮度を見分けるのも、肉の焼き具合を見るのも基本的には色で判断する。色は視覚言語であり、記号でもある。空間認識や、色を使った区別など、人間の行動を左右する物理的情報手段でもある。又、人間の心理情報を表わすときにも色は使われている。例えば、顔色、目の色などの言葉のように、人の健康状態や心理的情報を表わす表現にも使われる。など。

平均を表わす言葉に「十人一色」という言葉があるが、従来のデザインは全体の平均を考えて設計される傾向があったと分析する。年をとるとか、障がいをもつということ、考えていないデザインと言えるのではないかと。現在は多種多様なニーズが求められている。「十人十色」のデザインがユニバーサルデザインであると会場に訴えた。

色のユニバーサルデザインを考えるときに、ある疑問が浮かび上がる。それは、視覚障がい者などの見えにくい人には色のユニバーサルデザインは意味を持たないのでは？と。そこで南氏は創造力を働かせてみてくださいと切り出した。見えなくても、美しさを感じる心は一緒であり、美しさに関して価値がある。見えなくても人はイメージによって色を認識している。色の機能として「情報」、「安全性」、「機能」、「デザイン」などが上げられる。色のユニバーサルデザインは、ハードとソフトがバランスよく両立しなければならない。と語る。

色のデザイン等を考えるときの留意点とはなにか？

人は歳をとったり視覚障がいであったり、色の見え方はそれぞれ違ってくるということを考えなければならず、年を重ねるにつれて、見えにくくなる色があったり、まぶしく見えるなどの弊害が起こることが現在わかっている。写真で具体的な箇所、デザイン等を説明しながらわかりやすい色の要素を説明した。

わかりやすい要素とは？

・薄暗い ・淡い色 ・動いているもの ・遠くの色 ・面積が小さい etc . . .

(たとえば、淡い色どうしの組み合わせは避けたほうがよいなど)

最後に南氏は、ユニバーサルデザインは幅広い意味を持ち、ものづくり、街づくり、行政などにも通じるものである。彩りある豊かなデザインを未来に残すために、私たちが今からその種をまかななければならない。ユニバーサルデザインはそのキーワードとなる。皆さんも色を身近な存在と感じてほしいと考えを述べた。



### 第2部 パネルディスカッション内容

#### テーマ：「みんなにやさしいデザインてなあに？」

松井氏（学識経験者）をコーディネーターとして、講演いただいた菊地氏や南氏のほかに行政代表の斉藤氏や設計協会代表の鈴木青年部会長を交え、様々な角度からユニバーサルデザインを考えることができた。各氏のやりとりに注目してみる。

松井氏：住環境などのハード部分のユニバーサルデザイン（UD）については、よく話されますが、今回は、原点にもどり、考え方の部分、ソフトの部分を中心に話し合って行きたいと思います。最初にパネラーの方に挨拶を含めて、UDに対する思いを少しお話願います。

南 氏：UDを意識し始めたのは、介護施設のカラーコーディネートを頼まれてからです。そのときに福祉施設も一般の施設も変わらない。線引きするのはおかしいと感じました。UDは一部の人のものではないのです。私のUDの歩みは、福祉との歩みでもあります。

菊地氏：保育園内のバリアフリーの件でUDを意識し始めました。講演でも話したように、ものの見方、考え方を考えることで、補えるものもあると思います。UDは伝えていく人間によって変わっていくのではないのでしょうか。

斉藤氏：現在、県のUD指針の策定に携わっています。UDに関して正直に言うと、まだ走りながら考えているような状態です。以前、県営住宅の建て替えに携わった時に、そこに住んでいた障がいを持つ方に行政がそんなことをしてくれるんですか。と言われてショックを受けたことがありました。県施設のバリアフリー化、ハートビル法の策定、福島県やさしいまちづくり条例の策定など活動してきましたが、ある障がいを持つ方に、日本は住みにくいのでアメリカに行ったと聞かされて、ショックを受けたこともありました。施設整備の中での疑問、問いかけをしていきたいです。

鈴木氏：今日はUDを学ぶという立場で参加しております。私たちの仕事の建築は自由で創造的だというイメージがありますが、ある面では法律や条令にしばられております。その法律や条令で決められていることの本質を知る機会と考えています。

松井氏：UDを推進していく必要があると思いますが、自分たちがUDを理解したり、発想するためのキーワードに「気づき」という言葉が上げられると思いますが、どのような「気づき」が必要だと思われますか。

南 氏：恵まれた環境ではなかなか気づくことはできないと思います。気づくためには、問題意識や疑問を持つことが必要です。障がい者はまたは環境によって作られます。たとえば、重い荷物を持って歩くとき、気づくことがあると思います。自分自身がいつも同じ条件で過ごせるかはわからないということを考えてもらいたい。

菊地氏：保育活動のなかで子供に食事を与えるのに、UDのスプーンを見つけたので使ってみました。非常に使いやすくてできていました。それは、今までの常識の中のスプーンの形ではありません。子供や高齢者などそれぞれの立場にたつたときに気づくことができると考えます。

斉藤氏：気づかぬふりもあるのではないだろうか。障がい者と接したときに過剰反応してしまうことがあります。それは多分になれていないからでしょう。それぞれ別の環境で過ごしてきたので、気づくことができないのではないかと。もっと障がい者と接する機会が必要だと考えます。

鈴木氏：年齢で感じることがあります。例えば携帯電話の操作で、最近は多機能で操作も複雑になってきています。多機能なのはよいですが、操作が複雑で十分に機能を使いこなせていません。多機能と単純機能との疑問を持っています。

松井氏：気づきには、物理的環境についてと、他の人の立場を理解できるかというような2つに分けられるのではないのでしょうか。ここには、「やさしさ」という言葉も含まれてくるとと思いますが、「やさしさ」について、どのような考えをお持ちですか。

斉藤氏：誰もが「やさしさ」を持っていると思います。しかし、日本人の性質でやさしさに「てれ」や「ためらい」があります。例えば、車椅子の方が手をかしてもらいたいとき、強要しているように思われないか、手をかす側は、手伝っていいものだろうか。というような具合にです。お互いにためらいからの脱出が必要で、いい意味でのおせっかいが、時にはやさしさになると思います。

菊地氏：子供たちに「やさしさ」を教えるときには、実体験のなかから学ばせることが大切です。年長さんがした子の面倒を見てあげる。そうすると、面倒を見てもらった子が大きくなったときに自然と下の子の面倒をみてあげられるようになる。やさしさを常識として伝えていく、見せていくことが大切です。

南 氏：やさしさの色と聞かれたならば、白であると思っています。それは、すべての色を含んでいて、何色にでも染められるというところからです。やさしさとは「りんごの種」のようなもので、表面的にはわからないものです。相手の立場を理解し、むきあい、自分の立場での決め付けをしないことが大切であると考えます。

鈴木氏：まわりの人たちをどれだけ見れるかということもひとつ言えると思います。

松井氏：UDの基本には「すべての人に」という考え方がありますが、どのようにお考えですか

南 氏：「すべての人に」は現実には難しいことです。100点をとることを目標にすれば、100点に近づける。そんな考え方で、ベストを尽くすということだと思えます。

菊地氏：今は、それぞれの個性を伸ばしていくという方針がとられています。それぞれにあわせた対応が必要で、UDに関しても同じで時と場合によって違ってくるでしょう。そこですべての人が気づくというようなことがソフト面では重要なことだと考えます。

斉藤氏：建物作り携わっているものには、「すべての人のために」と言うのと嘘になってしまうかもしれません。これから建てられる建物については、UDに関して十分検討できるが、既存の建物については、UDに改善していくにも対応できない箇所もあります。そんなときは、人の助けがどうしても必要になってきます。古い建物をどう工夫して使用していくか。ハードの整備をするものとしてつらいキーワードでもあります。

鈴木氏：設計者の立場でも、「すべての人のために」とは大変むずかしいことです。いろいろな人が使用する施設のなかで、いろいろな対応が考えられますので、いくつかの組み合わせを考えることが必要だと考えています。

松井氏：また、UDには「人権」擁護を含めた考え方が必要ではないかと考えていますが、どうお考えでしょうか。

菊地氏：最初に勤めた保育園では、職員の中で男性が1人という環境で、偏見を感じたこともあります。誰もが後から入ってくるものを異質に感じてしまうものです。それをどのように受け入れていくか、またどう入っていくかが大切です。UDに関しても同じことが言えると思います。子供のころからUDを見ていく、常識としていくことだと思います。

斉藤氏：福島県在住の外国人のシンポジウムがあり、そこである韓国人が日本のいじめは文化ですと皮肉を言われたことがあります。それは、日本人は喧嘩をすると黙ってしまう。自分のどこが悪いかわからないというのです。われわれは普段、自分の人権は感じないものです。外国人の方と話をしてみても無意識に人権を無視したような行動をしているかもしれないと改めてかんじたことがあります。

南 氏：UDにおいて「人権」に関わることだと思いますが、選択肢を増やしてあげることだと思います。障がい者専用だとか限定してしまうのは、とても障がい者にいやな思いをさせています。健常者も障がい者も区別のない考え方が大切だと思います。

松井氏：最後に何か言っておきたいこと、聴いてみたいことはありますか。

斉藤氏：南先生に2点質問したいことがあります。まず、南さんに点字ブロックの黄色について、景観を損なうなどという意見もあるようですが、どうお考えか。また、サインを創るときの留意点などありましたら教えてください。

南 氏：現在のところ、比較的黄色が見えやすいということで、しきりに黄色といわれておりますが、場所によっては、明度などに気をつければ違ってもよいのではと考えています。しかし、あまり違いすぎると混乱を招くおそれがありますので、これからもっと調査が必要だと思っています。サインを作るときの留意点としましては、デザインとしては、わかりやすく、明度差をつけ表示内容が見やすくすることが大切だと思います。また、どのようなサイン計画がこのましか方針を明確にして示していくことが、必要ではないでしょうか。

斉藤氏：ありがとうございます。菊地先生にも質問があります。近年、遊具で子供が怪我をするとその遊具を撤去してしまうという流れですがそのことについてどうお考えですか。

菊地氏：子供たちの遊びは変わってきています。そんななかで、遊び方を教えてあげる、伝えていく力がなくなってきているのではないのでしょうか。ちゃんとした遊び方を教えていけば防げた事故も多くあったはずですが、ただ、最近遊具はとても使いやすくてできていますので、それは教えるほうにもいいことだと思っています。

松井氏：最後にまとめて行きたいのですが、今日は基本的にソフト面を中心に話してきました。まずUDには「気づき」が必要で、その中には、物理的環境的なものと、人に対する内面的なもの2種類あげられました。そこには、「やさしさ、思いやり」が必要であり、それがUD浸透のキーワードとなるのではないのでしょうか。われわれが先駆者となりUDを伝えていき、今の子供たちが、「これのどこがUDなの」というようにUDが常識となっている未来がくるようにしていきたいし、そうなることを望んでおります。ありがとうございました。



開催日：2004.12.4

『ユニバーサルデザイン』フォーラム

・・・みんなにやさしいデザインてなぁに？・・・

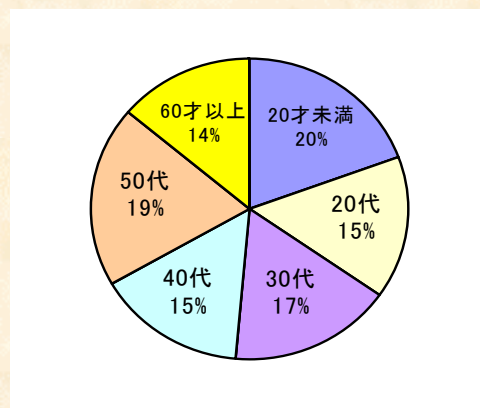
アンケート結果

アンケート総数 72人

問1 年齢

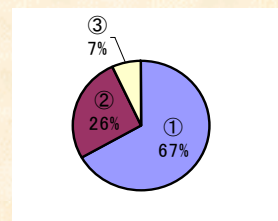
問2 性別

20才未満	14 人	男性	10 人
		女性	4 人
20代	11 人	男性	3 人
		女性	8 人
30代	12 人	男性	4 人
		女性	8 人
40代	11 人	男性	7 人
		女性	4 人
50代	14 人	男性	12 人
		女性	2 人
60才以上	10 人	男性	9 人
		女性	1 人
合計	72 人	男性	45 人
		女性	27 人



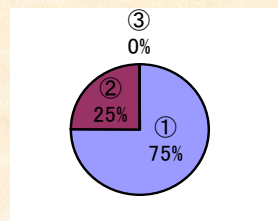
問3 本フォーラムにご参加いただく前は『ユニバーサルデザイン』を知っていましたか？

① 内容まで知っていた	48 人
② 言葉だけは知っていたが内容については知らなかった	19 人
③ 知らなかった	5 人



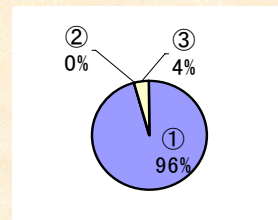
問4 本フォーラムご参加により『ユニバーサルデザイン』について理解が深まりましたか？

① 理解が深まった	54 人
② なんとなく理解できた	18 人
③ 理解できなかった	0 人



問5 今後『ユニバーサルデザイン』を広めるべきだと思いますか？

① 広めるべきだと思う	69 人
② 広めるべきとは思わない	0 人
③ よくわからない	3 人



問6 本日のフォーラムに関し、ご意見・ご感想をお聞かせ下さい

【本フォーラムの内容について】

- ・今までは住環境、ハードの面でのUDを主に学んでいたため、ソフトを中心とした今回のフォーラムは新鮮だった。
- ・少し難しいと思うところもあったが、自分の視野が広がったように思える。
- ・とても奥が深いと思った。UDの推進を望みます。
- ・レベルの高い話しに思えた。これまで気づかなかったことを考えさせられた。
- ・UDがすべての場合で必要ということではないことを知った。
- ・UDは物だけでなく、人に対する心がまず大切なことなのだと思えて考えさせられた。
- ・UDは建築物だけに対してのものだと思っていた。
- ・菊地さんや南さんの講演を聞いて、UDは建築物だけじゃなくいろいろな場面で通じるものがあることがわかった
- ・UDについて深く考える良い機会であった。
- ・菊地先生の講演に同じような体験があったので、おおいに共感できた。
- ・菊地先生の講演の中の「床の段差をなくしたら子供たちの危険回避能力が低くなる」という話しをきいてUDの難しさを感じた
- ・UDの範囲が広すぎてすべてにたいして使いやすいデザインを求めるのは難しいと思う
- ・他人の立場にたって考えるとともに、いろいろな立場の人の意見交換が大切だと感じた。
- ・UDの本質を伝え、感じさせることが大事だと改めて思った。
- ・建築・デザイン・色・子供など多岐に渡る範囲で考えることができてよかった
- ・UDについての視野を広めることができた。
- ・UD=バリアフリーというイメージがあったが、ソフト面の話をきけてよかった。
- ・基調講演にもうすこし時間をとってもらいたかった。
- ・障がいの「かい」をひらがなにすれば、子供の「ども」もひらがなにしたらほうが良い
- ・菊地先生の話が良かった。
- ・UD指針の中のさりげない(さりげなさとうつくしさ)はとても良いと思う
- ・パネルディスカッション時のテーマとパネラーの話がまとまらない感じ
- ・新しい視点からUDをとらえた面白い企画でした。
- ・イケメン保育士さんも良かったですが、斉藤主幹もステキでした(30代女性)
- ・非常にわかりやすい内容だった
- ・UDの定義が広すぎるためもう少し目的を絞った話をたくさん聞きたかった。斉藤主幹の具体的な話はとても楽しく聞かせていただきました
- ・一部の人のものではないという、UDについての南先生の話が印象的でした
- ・司会が良かった

【主催団体の(社)福島県建築設計協会県北支部に対して】

- ・今後も、UD普及のために是非このようなフォーラムを開催してほしい
- ・このようなフォーラムに参加できて良かった。
- ・UDをまちづくりに反映してもらいたい。(車道と歩道の段差解消など)
- ・UDの長所、短所につてよく考え、まちづくりしてもらいたい
- ・学生にとって大変いい勉強になった
- ・このようなタイムリーなフォーラムをこれからも開催してほしい
- ・障がい者の体験をしてみれば
- ・UDを推進してもらいたい
- ・建築設計協会の色を前面に打ち出したほうがフォーラムのまとまりがでたのでは
- ・『福島型』のUDを自由な発想で作り上げ、まちづくりに反映してもらいたい
- ・学生さんの参加も見受けられました。これからも若い方、学生さんに呼びかけたらよいと思う